

C-15 被服デザインのシステム化を目的とした素材の数値化について (1)  
近大豊岡女短大 ○黒田喜久枝 岡崎三枝

目的 近年婦人服の量産化が進むにつれて、裁断、縫製などの技術面では、機械化が進み広められているが、被服デザインの分野では、感覚的、経験的評価をもとになされ、機械化など認められない面である。しかし、素材などの物的要素と形式要素の形との関係による物的要素の選択においては、素材の計測を基に、ある程度の数値化は可能であろうと考えられる。これが少しでも便えるならば、未経験者にも可能な部分が生じ、また教育面においても有効であろうと考へ研究したものである。今回はフレヤースカートの場合を設定し、ウール素材について報告する。

方法 素材をウールの織物として、10種類を選び、各々重量、厚み、織系、密度、剛軟度、防しわ度などを計測する。一方、形式的要素の評価のため、セミサーキュラスカートの $120^\circ$ 、 $150^\circ$ 、 $180^\circ$ の3種と、1部に $210^\circ$ の4種類の4枚揃え、ひざ丈、裏なしのフレヤースカートを作成した。上記スカートの良否を判定するため、活躍中の服飾デザイナー、服飾産業のスタイリストなど経験豊富と考えられる10名、更に服飾関係職業の男女10名の計20名が評価したものを基に、素材の物理的計測と比較検討をした。

結果 材料の物的計測値のうち、フレヤースカートと関係のあるものは、重量、密度、剛軟度があげられ、特にヨコ方向の剛軟度、ドレープ性、径緯の織系の差などが大きな要素を持つことが認められた。今後フレヤースカートについては、バイヤス裁ち、袖などについての検討をすすみたい。